

## 手と想像力

若者



北山辰樹\*

同僚のポストク、O氏夫妻に男の赤ちゃんが生まれた。早速、妻と二人でおもちゃ屋へ走ったが、アリゾナ州第二の大都会ツーソンではこれといって気のきいた玩具もなく、結局 دونالدダックやら何やらがぶら下がったアメリカ風ガラガラを贈ることにした。隣の棚にアメリカ製教育玩具を見つけたのでこれを付けてさしあげた。プラスチック製で鉄壺鈴の形をしたこの玩具の二つの球部のうち一方は握ると音がし、他方は音がしない。間をつなぐ握りの部分を握むことで手や指の活動を促進し、大脳への刺激を盛んにし、さらには音の出る球部と出ない方を識別することによって知能の発育を助けるという触れ込みで、母親用のマニュアルまで付いている。どの程度まで効果があるのか定かでないが、医療品メーカーの製品だということのだからそれらしく思えてくる。翌日、中味のわりには嵩張る箱を抱えてO氏のアパートを訪ねた。生後一週間そこそこの赤ん坊を目の前にするのは我々夫婦共々初めてのことであった。首が据わった頃の赤ん坊しかイメージになかった私には思ったより小さな彼が手や足を動かしてくれるのさえ不思議に思えた。例の教育玩具が役に立つにはまだ彼の手は少し小さ過ぎる。

子供の頃、自分は手先の不器用な人間だと信じていた。今は器用だというわけではないが、図工の時間などは大の苦手であった。中学校に上がって、職業適正検査なるものを受けさせられ、巧緻性—「普通」という評価を得た。高々、人並みといった程度の評価に過ぎないが、正直なところ不器用コンプレックスから半分解放された思いがした。中学も終り近くになって、そんな私がギターを買ってくれと言いだしたもの

だから、両親は半分呆れ顔、半分渋々顔で、どうせすぐに飽きて放り出してしまうに違いないと言いつつも安物を一台買い与えてくれた。当時はエレキブーム、フォークブームの最中であつたが、へそ曲りな私はその少し前から始まっていた阿部保夫のテレビギター教室を見ながら、カルカッシのエチュードなどを弾いていた。飽き性の私が今だにギターを手放さずにいるというのは我ながら不思議な気がする。指先を動かすのは老化防止になるとかいうから、60,70になっても、ギターの指板や弦上で指の体操をして、傍の迷惑も顧みず、雑音を奏でようと思っている。

手のことを書いていて二人の音楽家のことを思い出す。先年来日を果たしたホロビッツの手をテレビで見たが、硬質でいかにも神経質そうな印象を受けた。日本での恐らくは最初で最後の彼の演奏を評して「ひびの入った骨董品」と言った評論家がいた。彼の存在自体には意義を認められた評価と受けとれなくもないが、それ以上の好意は認めがたい。尤も、今年になってモスクワに里帰りした時のコンサートの評判は上々のようであった。もう一人はセゴビア。彼の手は大きくてふっくらと柔らかそうだ。15才の時、スペインのグラナダで最初のコンサートを開いて以来、80年近くの間、つまりは20世紀のほとんど全期間にわたって演奏活動を続けている。ギターファンの中には、セゴビア崇拜者も多いが、アンチセゴビア派も少なからずあるようだ。というのも彼の音楽が時にセゴビア節と呼ばれるように独自のアクセントを持つことがあり、下手に真似るととんでもないグロテスクなものになりかねない毒を含んでいるためであろう。彼の指から紡ぎ出される音の彩は実に幅広く豊かで、その一つ一つに彼の表現意志が乗り移っている。私が聞ける彼のレコードの多くは彼が60

\*北山辰樹 (Tatsuki KITAYAMA). 大阪大学基礎工学部、合成化学科、助手、工学博士、高分子化学

才代に録音したものである。常人の尺度でいえば停年後の仕事ということになる。というのもそれ以前にはまだLP盤がなかった。今でも一部の愛好家は彼の壮年時代のSPレコードの素晴らしさを力説する。彼は今年93才になるが、最近行なわれたロスアンゼルスでのコンサートは、私とその広告を見付けた時には既に“SOLD OUT”になっていた。

音楽演奏という芸術は、絵画などと違って、楽譜というテキストから音を引き出すという作業を通して自己を表現するという制約を背負っている。おまけに音と自分との間に楽器という厄介な介在物がある。あらゆる制約を離れて新しきを求める現代音楽の一派なら足でもピアノを弾くかもしれぬ。セゴビア先生曰く、「欲しい音を出せるなら鼻で弦を弾いたってかまわない。」とは言うものの多くの場合、手が一番重要な働きをすることに異論はないと思うので、手を楽器と人間のつながりの主役に据えることにする。ところが、この手がなかなか言うことを聞いてくれないのが素人のもっぱらの悩みで、せいぜい間違いなく上手に弾けることを目指するのが精一杯で、自己表現まで手が届かない。

多少とも楽器に手を染めると、音楽そのものにはなく、演奏行為の方に関心がいってしまうという落とし穴がある。無駄を排した合理的な手の動きはそれ自体、ある種の美しさを備えているし、手の動きを見ていると、奏者の表現したいことが見えてくるような錯覚を覚える。正統な音楽の楽しみ方ではないとは思いますが。

我々化学者は、手のとどかぬところにある分子中の原子を並び変えたり、分子と分子をつないだりするという隔靴搔痒の最たる営みを生業としている。我々の手の代りになるような試剤やら触媒やらを考案してはいろいろ試してみますが、この代りの手もなかなか思うように働いてくれないことが多い。直接には手で触れない歯痒さを紛らわすため(?)、化学者はよく分子模型を机上において眺めたり弄んだりして思索に耽る。この玩具は相当に高価なものもあるが、赤ん坊用の教育玩具より効果は確かな気がする。

格安の高分子模型を見る機会が最近あった。西ドイツのある教授が一般向けの evening lecture の中でポリエチレンの線状高分子の話をしたあと、おもむろにポケットから一本の毛糸を取り出し、オーバーヘッドプロジェクターの台の上に載せてスクリーンに写して見せた。ランダムコイル状高分子の出来上りである。このあとは毛糸を伸して分子の長さの話になり、最後は夫人お手製の小さな編物をスクリーンに写して、網目状に組織化された高分子へと話が進んでいった。講演のあと一人の学生がポリエチレンの分子に結び目は出来ないのかと質問した。毛糸を手にしていていつの間にか結びが出来て往生するといった経験は誰にもある。この質問は素直な想像から発したもっともな問といえる。教授の答は、有り得ることだが、確かめる方法がまだないとのことであった。教授の高分子モデルがスクリーンの像よりも、プロジェクター上の毛糸の方にかの学生氏の注意を惹いてしまったのは、教授の意図外のことであったかもしれないが、素朴な想像からの意外な質問を引き出した点では成功であった。

自然の営みは人間の想像を越える深みと広がりをもっているだろうが、自然科学は人間が築いて来たものであり、ある意味で人間の想像力の範囲内にある。自然に対する働きかけは人間の想像力によって規定され、自然からの応答がまた人間の想像力を刺激する。応答に対しては注意深く、謙虚に耳を傾けなければならないが、働きかけの方はその人の表現意欲によることも多い。こんなことがあれば面白いといった単純な想像からでも、自然法則は単純であるべきだといった哲学からでも自然に向って自己表現ができよう。もちろんその表現を可能にする手の働き、技術の裏付けが必要であり、想像力を伴った手の働きが大切だと思う。

アリゾナの夏はまだ先だということにすでに気温が100°Fに達する日があった。おそらく秋には、こんな妄想などアリゾナの空に蒸発してしまっているに違いない。